

馬の疝痛予防

帯広畜産大学 獣医学科 助教授 佐々木 直樹

はじめに

疝痛は腹部の疼痛を伴う100近い疾病を含んでいますが、一般に胃腸にその原因があるものをさします。馬の胃腸は解剖学的にも機能的にも疝痛を起こしやすい要因を持っており、馬の疾病のなかでも運動器疾患について多く発生します。馬の疝痛は放置しておくと、悪化して馬の生命を奪う恐れ病気でもあります。このことから、胃腸疾患を原因とする疝痛の徴候と予防方法についてご紹介いたします。

疝痛の種類

1. 過食疝

急激に餌を摂食することにより生じ、胃拡張に伴う疼痛を伴います。まれに大腸（盲腸・結腸）の変位、便秘あるいは気腸（消化管内ガスの貯留）により胃内容が十二指腸へ流れずに発生することもあります。悪化すると鼻から胃内容物の逆流がみられ、胃破裂に発展することもあります。

2. 痙攣疝

寒冷、興奮、強調教による疲労、悪質な給餌により生じ、消化管平滑筋の収縮亢進（蠕動運動の増加）に伴う疼痛がみられます。蠕動が亢進しているため、腹鳴音の増大を聞くことができます。軟らかい糞を排出することがあります。比較的疼痛の程度は軽度です。

3. 便秘疝

休養などにより蠕動運動が減弱して消化管内容物の貯留が生じます。消化管内容物は水分が減少して、糞は小さく硬くなります。数日間にわたり、排糞が見られないこともあります。便秘の多発部位は盲腸や結腸などの大結腸であり、便秘が長引くと消化管内にガスの貯留（風気疝）を引き起こすことがあります。

4. 風気疝（図1）

消化管内にガス（メタン、窒素、炭酸ガス等）が異常発生することにより生じ、消化管壁の拡張に伴う激しい疼痛がみられます。また、錯癖馬では、消化管に多量の空気を飲み込むことにより風気疝を発症しやすくなります。

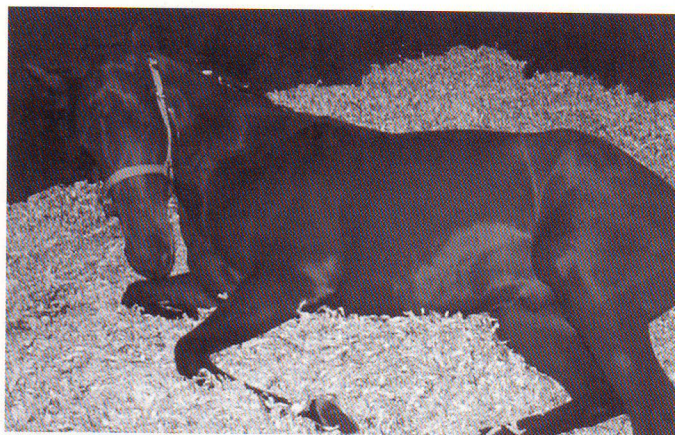


図1 疝痛馬（風気疝）

消化管に多量のガスが貯留し、腹部の膨大がみられます。通常、疝痛馬では頸部から腹部にかけて発汗がみられます。

疝痛馬の看護方法

疝痛馬には、馬服を着用させ、必要に応じて暖房等により体温の低下を防止する必要があります。馬房には十分な敷き藁を入れます。疼痛が軽度で曳き運動が可能である場合には、10～30分程度の運動を行うと腸蠕動を刺激すると同時に鎮痛効果があるとされています。また、曳き運動は転倒による腸捻転の悪化を防止し、馬の損傷を防ぐ効果もあります。従来から疝痛馬に対しては腹部マッサージが行われており、下腹部を中心としてゆっくりと摩擦すると疼痛の軽減につながるということが知られています。獣医師による治療を受けたあとは、獣医師の指示に従い絶食、口かご装着等を行い、疝痛の再発を防止します。

疝痛の予防方法

疝痛の原因は、不適切な飼養管理に起因することが多いため、それらに注意することにより疝痛の発生を予防することができます。濃厚飼料（穀物）の多給、乾草の変化は、疝痛の誘因となるので適切な

管理が必要となります。当然、新鮮な水を常時摂取できる環境にあることも重要となりますし、水の摂取量にも気を配る必要があります。歯の疾病（斜歯等）により腸閉塞や変位疝の発生が高まることが報告されており、歯の適切な管理も必要といえます。日頃から口の中を観察し、よだれや食べこぼしなどの異常がある場合には獣医師に相談してください。便秘疝を発症する馬の多くは、休養中の運動不足に起因していることから、休養中の馬の糞状態には注意を払う必要があります。特に、糞が小さく硬くなり始めたら、芒硝、流動パラフィン、整腸剤を投与することにより便秘を予防する必要があります。寄生虫による疝痛も発生することから、獣医師と相談して適切な駆虫プログラムを実施することも重要です。

※疝痛の原因となる消化器官の仕組みについては本誌「からだの仕組みを知る」にも掲載しておりますので併せてご覧下さい。



5. 変位疝 (図2、3)

消化管の位置が変化したり、捻れたりすることにより生じ、激しい疼痛を伴います。消化管のねじれ状態により変位、嵌頓^{かんとん}、絞扼^{こうやく}、捻転^{てんらん}、纏絡^{でんらく}および重積^{じゅうせき}に分けられます。軽度な結腸の変位では、回転によって自然に整腹することもあります。重度な結腸の変位や小腸の捻転では消化管の血行障害が生じ腸壊死（組織の死）に陥るため、開腹手術による消化管の切除が必要となります。

6. 寄生疝

消化管に馬回虫、葉状条虫、円虫、糸状虫、馬蠅幼虫などが寄生することにより、疝痛を誘発します。馬回虫は小腸に寄生することから、虫体による腸閉塞や腸破裂を引き起こします。葉状条虫は回盲口周囲の盲腸粘膜に寄生し、回盲口の管腔狭窄、盲腸破裂および穿孔などを引き起こします。円虫は前腸間膜壁に結節を形成します。糸状虫は腹腔内に寄生し、腹膜炎を引き起こします。馬蠅幼虫は胃の無腺部と腺部の境界に付着しており、寄生数が多くなると胃潰瘍や胃穿孔を引き起こします。

7. その他

最近、馬の胃においてヒトと同様に胃炎や胃潰瘍がみられ、ストレスや鎮痛解熱剤の連用によりその発生が知られています。また、麻痺性筋色素尿症（すくみ）などで排尿障害があるときに、疝痛症状を呈します。この他にも子宮捻転や陰囊ヘルニアにみられるような性別に由来する疝痛もあります。競走

馬や乗馬では、運動後にすぐに給餌を行うと、食道梗塞（のどつまり）を発症することがあり、苦悶、食塊を含んだよだれや鼻孔からの排出がみられます。普段から十分なクーリングダウンの実施や水の摂取後に給餌することを心がける必要があります。

疝痛の徴候

馬の疝痛では、初期の対応と予防が大変重要です。疝痛初期に適切な対応を行うためには疝痛の徴候を早期に発見することが必要となります。疝痛の初期症状の代表的なものとして、元気低下、食思廃絶（飼い葉に口をつけない）、横臥、前掻き、発汗、腹顧（腹部をみる）、排糞がみられない、転倒、後肢の開帳および排尿姿勢等があります。これ以外にも、疼痛の程度は目と口から有る程度判断することができます。通常、馬の目は穏やかな形状を有しており、ゆとりのある馬は口遊びをしています。疼痛のある馬では目が三角形にゆがみ、口遊びが無くなります。このことから、普段から馬の表情をよく観察しておく必要があるといえます。

一般的に、深刻な状態ほど疼痛の程度は増加します。通常、腸捻転は捻転していない疝痛より激しい疼痛を示します。夜間に激しい疼痛から転倒を繰り返した馬では、腰角周囲皮膚の擦過傷や目の周囲の腫れがみられますし、敷料が乱れていることで疼痛の程度を判断することができます。以上のような馬の異常に気づいたら、ただちに獣医師の判断を仰ぐ必要があります。



図2 疝痛馬（腸捻転）

小腸の捻転による激しい疼痛のため起立が困難な状況にあります。頸部の発汗ならびに腹部の著しい膨大があります。



図3 結腸捻転

疼痛発生から24時間後に開腹手術を実施。結腸は720度捻転しており、著しい腫脹と漿膜の変色（暗赤色）が見られる。